

インドの家事労働者（お手伝いさん）たち

環境・国際研究誌 2001年4月号 デリー在住 新村恵美

インドの家事労働者（お手伝いさん）たちは、地方から大都市に大勢来ています。そのお手伝いさんたちの労働条件は劣悪なものです。そんな中、ビハール州チョタナグプール地域出身のお手伝いさんたちは「チョタナグプル勤労女性フォーラム」という団体を作って、お手伝いさんたちを支援しています。

都市で働くお手伝いさん

近年好調な経済成長をとげているインド。当然のことながらそれは社会にも大きな影響を与えています。今や人口10億人中、2億人から5億人ともいわれる中産階級が生まれ、都市で核家族化が進む一方、やはり社会変容の波を受けて従来の仕事では暮らしていけなくなった地方の貧しい人々が仕事を求めて都市にやってきます。

所得格差が大きくカーストによる階層社会でもあるインド社会では、もともと富裕家庭ではお手伝いさんを雇うことが一般的でした。最近は増加した中間層からの需要が高まる中、特殊な技能を持たなくてもすぐに始められる「お手伝いさん」の仕事に就く地方からの移住者が大勢います。

なお、「家事労働者」という言葉は英語の Domestic Worker の定訳です。また、日本語で「女中」という言葉は「特別な場合以外は使わない方がいい」とされ、「お手伝いさん」「家事手伝い」というのが適切だとされています（「放送禁止用語」による）。

お手伝いさんの苦境

インドのお手伝いさんの平均的な労働条件は劣悪です。

まず低賃金であること。インドには「最低賃金法」という法律がありますが、これには対象

となる職業のリストがあり、現在お手伝いさんはリストに載っていません。したがって、賃金は雇用者の気持ち次第でどうにでもできるのです。

そのため雇用者は10、20代の「従順であまり反抗しない」女性や子どもを、より求める傾向にあります。極端な例ですが、「ある11歳の少女。休日なし、1日16-17時間労働、雇用者は1年に1回、彼女の両親に1,300ルピー（注1）を払うだけ」というようなことも、現状では雇用者に許されてしまうのです。この少女は自分ではお金を一切もらうことができません。全く自由を奪われた状態です。

労働者として認められにくいお手伝いさん
なぜお手伝いさんは弱い立場にあるのでしょうか。

第1に、家事という仕事そのものの性質が、お手伝いさんを労働者として認められにくくしています。例えば日本ではお手伝いさんを雇う家庭は稀で、家事は家族内で分担するものですが（実際には女性が多く負担している場合が多いですが）、文字どおり朝から晩まで、年中無休。家事はこのようなきりのない仕事という性質を持ちます。お手伝いさんの仕事も性質は同じで、特に住み込みの場合、際限なく仕事を任されることが多くなります。年間を通して基本的に休日をもっていない人が多いそうです。雇用者

（注1）1,300ルピーは約3,400円。雇用者によって非常に差がありますが、後述のCWWFという団体は雇用者に1ヶ月最低1,500ルピーを要求しています。

が休みの日ほど、お客さんや親戚が訪ねてきて人手が必要だからです。

第2に、お手伝いさんは家庭という密室で働いており、それぞれが孤立しています。組合を作って雇用者と交渉するということできません。雇用者からのセクシャルハラスメントなど

お手伝いさんの組織 - プルカリアさんのこと

全国規模にはならないものの、インド各地にお手伝いさんの組織があります。その1つ、Chhotanagpur Working Women's Forum (CWWF、チョタナグプル勤労女性フォーラム)は元お手伝いの女性が自分の仲間や支援者と一緒で作った団体です。

プルカリア・ミンツさん、現在40歳代前半。ビハール州のトライブ(「部族」。インドでは「トライブ」と呼ばれます)のクリスチャン家庭に生まれました。10歳まで学校に行った後、いくつかの職を経て28歳でデリーに来ました。デリーでお手伝いさんとして働き、仲間と情報交換をするうちに共通の問題があることを知りました。



「カラム・フェスティバル」入場を先導しているのがプルカリアさん。トライブ出身の政治家がこの日のメインゲストとして迎えられた。

があっても、仕事を失うことを恐れるために声をあげられる人は少ないでしょう。

第3に、法律が届きにくいこともお手伝いさんの立場を不利にしています。インドには労働者を守る法律はいろいろありますが、お手伝いさんを守るための法律は今のところありません。

キリスト教系の団体から支援を受けて本格的な組織を作ったのは1990年。お手伝いさんの多い地域の家庭を1軒1軒訪問して状況を調べることから始めました。組織の拡大や分裂などをへて、現在CWWFは彼女と同じビハール州チョタナグプル地域出身の500人のお手伝いさんが登録する団体になっています。お手伝いさんが雇用者と契約書を交わす際の立ち会い、トレーニングやピクニックの企画、事件に巻き込まれたお手伝いさんへの法的支援などを行っています。プルカリアさんは今、この団体の代表。従属的な響きのある「メイド」や「サーバント」と呼ばれたくはない、と主張します。働く女性、"Working Women"、として認識されたいという願いからです。

チョタナグプルというのはビハール州を含めてインド東部の5州にまたがる丘陵地帯で、もともといくつかのトライブが住んでいた地域です。森林資源・鉱物資源が豊富なために、イギリス統治時代より外部からの踏査や開発の対象となってきました。これに対して・現在、トライブの人たちは自治州を要求する運動や文化的アイデンティティの再構築に力を入れています。その一環として9月初め、チョタナグプル地域の伝統の祭り「カラム・フェスティバル」が、デリー市内のキリスト教系の学校の校庭



1日断食した女性たちが美しいサリーを着て「カラム」の木の枝のまわりを踊る。

を借りて行われました。美しく着飾った女性たちが会場の中心に据えられたカラムという木の枝の周りで踊ったり、トライブ出身の政治家が民族の団結を訴えるスピーチをしたり、最後には参加者全員で踊ったりと、来場者 6000 人を越える盛大なお祭りでした。



この日の来場者は 6000 人を越えた。

主な参考文献

- Armacost, N. C. (1994), "Domestic Workers in India: A Case for Legislative Action", Journal of the Indian Law Institute, Delhi
- Widge, A. (1995), Women in the Informal Sector: Multidisadvantages of Domestic Workers", Indian Social Institute, Delhi

インタビュー

- Ms. Phulkaria Minz, Chhotanagpur Working Women's Forum (CWWF), 2000年8月25日

折しもこの11月、インドに新しく3州が誕生します。ビハール州の南部も新しい州の1つで、トライブの多い地域が分割されます。

今回プルカリアさんにインタビューする際、彼女のヒンディー語を英語に通訳してくれたのはドクター・カカ (Dr. XAXA)。彼も同地域のトライブ出身で、普段は政府の病院で医者として働き、CWWF にボランティアとして関わっています。CWWF の最終的な目標を聞いたところ、ドク

ター・カカは、とても明解に答えてくれました。

「チョタナグプルから都市に働きに出る人の95%は女性、ほとんどがお手伝いさんとして働く。チョタナグプル地域の女性の男女の数のアンバランスは深刻な問題になってきた。女性たちにとっても都市での生活は苦勞が多い。しか

し、だからといって彼女たちが故郷に帰ったところで仕事があるわけではない。私たちの活動の最終目標は、故郷に小規模な産業を起こし女性たちが安心して故郷に帰れるようにすることです」

(了)

にいむら めぐみ、元シャプラニール = 市民による海外協力の会職員、イギリスのマンチェスター大学修士課程を経て現在デリー在住。インフォーマルセクターの女性労働者について、個人研究を進めている